

国学院大学学報

平成28年 9月 第649号 定期号(毎月10日発行) 1部20円

「夏のわかれ」
 じつかなる書齋をしたり。
 さらばいづ
 ふしのこころを
 際ひびくを
 (春のいづれに)
 釈 道彦
 祭 儀
 10月1日(土) 午前10時 神楽
 11月1日(土) 午前10時 神楽

経済学部が開設50周年



弘田名誉教授(写真左)と尾近学部長

昭和41年に経済学部が開設されてから、今年で50周年を迎えた。
 日、尾近裕幸経済学部長・教授と開設当初第二部長を務めた弘田嘉男名誉教授の対談が本誌で行われた。
 当時、三菱経済研究所研究員だった弘田名誉教授は昭和40年に本学に着任した。新たに開設される経済学部の教員として水田博教授(故人・当時)から勧誘を受けての就任だった。
 対談は、弘田名誉教授が国外派遣研究で見聞した米国や欧州諸国の様子や思い、土佐中学での恩師、松尾三郎先生(後の本法人理事長)との本学での偶然の再会や当時の学生たちの気質、そして画家としての歩みなどに展開。終始和やかな雰囲気であった。
 対談の内容は、来年2月刊行の『50周年記念誌』に掲載される予定。
 経済学部は、本学創立80周年を迎えた昭和37年に設置準備が始まった。既存の

節目にあわせ記念行事も

同学部では開設50周年を記念し、川勝平太静岡県知事らによる連続講演会をはじめ、記念講演会、学生フォーラムを開催する(一覽参照)。いずれも入場無料。連続講演会は事前申し込みが必要。
 これに先立ち、7月19日、神前に供えられる。当日は染色家で染司よしおか五代目当主の吉岡幸雄氏と吉岡工房のスタッフが来て、講話と和紙による神饌制作の手ほどきを行った。本学の特別招聘教授で

開催予定の経済学部50周年記念行事

企画名	講演者	開催日	開催時間	開催場所	参加対象者	申し込み方法
連続講演会(第1回)	川勝平太氏(静岡県知事)	10月8日(土)	14時~15時30分	常磐松ホール	一般・学校関係者	大学HPより事前登録
アクティブラーニング学生アシスタントフォーラム	角方正幸氏(株式会社リアセック所長)	10月29日(土)	第一部13時~ 第二部14時45分~	常磐松ホール	国学院大学・立教大学・関西大学学生	予約不要
連続講演会(第2回)	米沢則寿氏(帯広市長)	11月5日(土)	14時~15時30分	常磐松ホール	一般・学校関係者	大学HPより事前登録
経済学部開設50周年記念講演会	松井彰彦氏(東京大学大学院経済学研究所教授)	11月12日(土)	15時~16時30分	120周年記念2号館2104教室	一般・学校関係者	予約不要
連続講演会(第3回)	増田寛也氏(野村総研顧問)	平成29年1月21日(土)	14時~15時30分	常磐松ホール	一般・学校関係者	大学HPより事前登録

御花神饌ワークショップ 彬子女王殿下を迎え開催



8月5日午後1時から渋谷キャンパス若木タワー有栖川宮記念ホールで、一般社団法人心遊舎と本学教育開発推進機構ボランティアチームの共催による「御花神饌ワークショップ」が開催された。
 この御花神饌とは、毎年9月15日に石清水八幡宮(京都府八幡市)で行われている「石清水祭」に奉納される造花の神饌のこと。季節ごとの12種類の植物で構成された造花が和紙で作

られ、神前に供えられる。当日は染色家で染司よしおか五代目当主の吉岡幸雄氏と吉岡工房のスタッフが来て、講話と和紙による神饌制作の手ほどきを行った。本学の特別招聘教授で一般社団法人心遊舎の総裁でもある彬子女王殿下もご参加され、冒頭「うまく作るうと思えば、真心を込めて作ることが大切です」とのお言葉を述べられた。その後、殿下は参加学生たちと一緒に御花神饌を制作された。
 参加した学生たちは、用意された古代染めが施された和紙や米から作った糊など、普段使い慣れている文具とは異なる材料に苦戦しながらも、少しずつ梅の花や南天の枝を作り、和紙とは思えない生き生きとした御花神饌ができていった。できあがった御花神饌は、手直しがなされ、9月15日(木)に執行される石清水祭に神饌として奉納される。

日光市と包括協定締結

国学院大学は栃木県日光市とまちづくりや観光・産業、福祉などで相互に協力する包括的な協定を締結した。協定書の調印式は、8月4日午前11時から日光市役所で行われ、赤井益久学長と斎藤文夫日光市長によって協定書が取り交わされた。
 協定の内容は、まちづくり、国際交流、歴史・文化、生涯学習、観光・産業、子育て・福祉の振興など7項目で構成されている。具体的な事業は未定だが、本学の知的財産や人



協定書を取り交わす赤井学長(写真右)と斎藤市長

みはるかすもの

リオデジャネイロ五輪が列島を熱くさせた今夏。日本のメダル獲得数は過去最多となり、4年後の東京五輪にも期待が高まる。出場選手にもそれぞれ思いがある。一言でメダルといえども、それだけで結果を測る難しさを感じる。また応援が励みにもなるが、重圧になることもある。代表選手ならではの苦勞を忘れてはならない。リオでの成果と課題は、運営にも及ぶ。反省は東京に活かさねばなるまい。施設面はもとより、人手があつての運営である。世界のトップ選手が集まるスポーツの祭典。環境整備は当然のことである。先日新聞紙面に神社の外国人参拝客への取り組みが紹介された(朝日新聞9月6日夕刊)。5言語での確かな訳語が施されたおみくじや、鶴岡八幡宮での英語指導の事例が取り上げられていた。訪日外国人の中には、日本文化を体感するために神社を訪れる例が多い。祭祀を重んじ、古式・伝統が生きている神社が、日本文化を理解してもらおう絶好の機会であることは言うまでもない。こうした神社の試みは、4年後の五輪を見据え今後とも広げることが重要。東京五輪に向け、メインスタジアムをはじめ施設やインフラに注目が集まるが、ソフト面の整備もあつていかにできるか。神社のみならず、日本文化発信のセンターたる本学に関わる我々はそれぞれに何が出来るか。準備を始めるのに早過ぎることはない。